

M・エグルトー著

## 『アルジェリアの真相』

Marcel Egretaud. *Réalité de la Nation algérienne.*  
Paris, Editions Sociales, 1961. 318 p.

本書はアルジェリアの悲劇の“知られざる原因”に通じるものとして、植民の歴史と回教徒社会の成立から説きおこしている。しかもとおりいっぺんの考証ではなく、つねに現代との関連を追及している。ローマ帝国の占領時代のベルベル原住民の反乱については、マルクスの議論を引用して、土地のためのたたかいと自由のためのたたかいが合同した点を著者は指摘している。回教の浸透は、いったんは民生の安定をもたらしたが、15世紀以降ヨーロッパで科学技術の進歩に支えられて新しいブルジョアジーが台頭したのとは逆に、回教徒社会では封建的な要素が強くなって、生産は阻害された。停滞した社会につけこんでオスマントルコが北アフリカ一帯を侵略した。しかし17世紀にはその支配力が弱まり、とくにマグレブ地方は実質的にコンスタンチノーブルの治下を離れて、住民はアルジェリア人とみずから呼称していた。著者はこの点を強調して、「過去の歴史のいかなる時代にもアルジェリア国家は存在しなかった」とするフランスのアルジェリア併合論者の独断に反証をあげてみせる。1830年フランスは口実を設けてアルジェリア征服を開始したが、植民の推進役はフランス革命後急速にふくれあがった新興ブルジョアジーであった。侵略に対して、オランの領主アブデルカードルをはじめとする各地の権力者たちははげしく抵抗した。著者はこれを英雄的なたたかいと評価しながら、結局民族戦線の統一が成らず、フランスに屈服しなければならなかったわけを、アルジェリアに事実国民的な意識が十分育っていなかったことに求めている。民族的伝統の欠如はその後のフランスの支配を独善的なものとし、アルジェリアの近代史を苦難にみちたものとした点に注目する必要がある。本書は征服戦争でのフランス軍の残虐行為のかずかずを例証し、それがこだまのように1世紀を隔てた昨今のアルジェリア動乱に残響を伝え、非文明的な大量虐殺がいまなお横行していると述べる。さらに植民地時代の同化政策の美名にかくれた人種差別について具体的な例をあげ、19世紀末帝国主義拡大の時期から最近に至るまでの銀行資本と大コロン（フランス人入植者）にのみ奉仕する支配形態

の推移をたどっている。地中海を隔てた対岸にあるアルジェリアの、植民地として有利な事情に着目したフランスは、本国の延長といった形で強力な行政権を行使してきた。「追いはらい」政策により回教徒の土地は奪われ、入植してきたヨーロッパ人たちが肥沃な海岸地方を独占した。ヨーロッパ人はいちようにフランスの市民権を与えられて、いわゆるコロンとなり、アルジェリアの宝庫といわれ、最大の輸出産業を生みだすぶどう園の全部と大半の鉱山を手中におさめた。コロンと原住民回教徒の生活程度は隔絶し、富裕なコロンの資本家は、フランスの法律に保護されない回教徒の労働者を非人道的な方法で酷使した。こうした植民政策は、回教徒たちにはかりしれない憎悪を植えつけながら、経済開発とくに農業の面ではある程度の効果をあげた。しかし発展は貧富の差の拡大に通じ、1955年に100万人のコロンの農業生産は1000億フラン、一方人口では10倍の回教徒の生産はその半分にみたなかった。また植民地貿易による利潤は本国の大資本家に吸い上げられ、ごく最近ではドゴール政権と結ぶパリ連合銀行 BUR グループが、資本による植民地支配の中枢となった。さらに1957年サハラ石油資源発見後はロスチャイルドも加わり、ユニレバーなどの国際石油資本も乗りこんできた。フランス帝国主義と国際カルテルが握手したところに現代のアルジェリアの悲劇の世界的な規模にわたる背景があると著者は結論づけている。そしてドゴールがもっとも力を入るとみずからいう経済建設による民生の安定についても、ようしゃなく仮面をはがそうとする。すなわちボーンに建設中の鉄鋼コンビナートは、アルジェリアの地方的な自給形態に奉仕しようとするものではなくて、フランス本国の金属工業の一環としてのみ意味がある。コンスタンチン計画の名で知られるドゴールの経済建設計画は、実はアルジェリア自体の問題を解決しようとするのではなくて、サハラ石油資源を足がかりにして、フランスやアメリカの大資本家の問題を、国際的に拡大した舞台上で解決するものにほかならない……。有名な計画の意外に残酷な“顔”がえがきだされる。

以上フランスの統治を中心にして書かれた部分を前半とすれば、後半は解放戦争につながるアルジェリアの民族主義運動を軸として、最近までの情勢の推移をたどっている。まず回教徒社会で第1次大戦以降ヨーロッパ風の教育を受け、フランス伝統の自由思想に目ざめた中産階級が皮肉にも解放運動の先駆者となり、アラブ諸国の革命運動に刺激された小市民層と農民出身の労働者層が

これに加わってくる。この最後のものの参加によって、階級闘争の意識と愛国心が容易に混合したとしている。これは民族運動の本質に触れる部分で、著者はドゴールに頼る一部回教徒資本家は別として住民の大多数が結集した大衆運動にまで高まりアルジェリア征服時代の散発的な抵抗戦争とはまったく性格が違う点を強調している。もっともこの点については、アルジェリアの労働組合指導者 R. Dekkar などはもっと割り切って「農民と労働者が銃をもったことは、国旗と国歌を得るためではなく、土地改革のためである」とさえいっている。独立運動は本質的に階級闘争で、たまたま支配階層がフランス人コロンのであったとする解釈に立つもので、本書の立場もややこれに近い。多人種社会でのコロンの広大な土地占有を背景にして、農民一揆的なプロレタリア運動と民族解放運動が密着した形で登場したことは、おのおのが大衆動員の点で果たした役割の配分は別として、アルジェリア問題の特質といえることができるであろう。

著者は民族主義運動各派を位置づけるにあたって、いま FLN (民族解放戦線) の主流となっている MTL (自由民主獲得運動) の前身 PPA (人民党) が、あまりに民族的にすぎてフランスの人民戦線と対立したことをあげ、普通には運動の傍流とされるウレマ会などの団体をむしろ評価している。また FLN に属していない PCA (アルジェリア共産党) が実質的に FLN の闘争を支持し、民族運動各派の結集を助け、戦闘組織だけ反仏戦争に投入したいきさつなども、多分に好意的に述べている。こうした点で異論が予想されるが、一貫してフランス共産党に近い視点から情勢を展望し分析していることは、本書の1つの特色といえることができる。

1954年11月に開始されたアルジェリアの戦闘はすでに7年あまりも続き、その間フランス、FLN 両方の側に多くの人命の犠牲と破壊をしいて「新100年戦争」とさえいわれている。7年のあいだにフランスの政権はマンデス、フォル、モレ、モスリ、ガイヤール、フリムラン、ドゴールと変遷し、歴代内閣の命取りとなったのはつねにアルジェリア問題であった。フォル内閣以前は、アルジェリアはあくまでフランスの一部とするいわゆる「フランス人のアルジェリア」の強硬方針が政策の主流であった。社会党のモレ政権以降回教徒の自治を強化する方向に重点が向けられたが徹底せず、しかも右翼は強硬策の復活を望んでしばしば暴動をおこしたのである。最後に“6月18日の男(1940年のこの日ドイツに降伏し

たフランスに向かって、ドゴールはロンドンからラジオ放送で徹底的抗戦を呼びかけた)”を危機の際の救世主とする、国民的な人気に支えられて1958年5月ドゴールが登場した。

本書は以後1960年6月ムラン会議の失敗まで、政策の推移と平和交渉の経過を順を追って述べている。ドゴールが政権を担当した当初、民族自決の方式によるアルジェリア問題の解決に、なんらかの見とおしをもっていたかどうかということとは、かなり疑問のあるところで、本書もドゴールに対してはきわめて批判的である。58年10月のいわゆる“勇者の平和”提案、59年9月の国民投票を予定した休戦呼びかけ、60年6月の「アルジェリア人のアルジェリア」承認の提案と、ドゴールがつぎつぎに打った手について論評し、結局自由と平等の原則を忘れたフランス人の回教徒軽視が、アルジェリア問題の解決をさまたげるガンであると指摘する。植民帝国の崩壊の跡で、フランス、アルジェリア両国民ははじめて友好の手を差しのべ合い、アルジェリアの独立はフランスの敗退を意味するどころか、かえってその栄光を保持するあらたな機会となるといって、本書は結んでいる。

1957年以降の部分の記述は、再版の際追加されたと序文にことわり書きがある。激動期の渦中で書かれたものが、時がたって焦点のずれをもつのはやむを得ないことで、この追加分も61年のエビアン会議や FLN 側の政変をへたいまとなつては、物たりない感じはまぬがれない。とくにフランス右翼の秘密軍事組織 OAS の破壊活動に本書はほとんど触れていない。この点読者は最近の政情の変化を補足し、サハラの帰属についてのドゴールの決断と OAS の克服がアルジェリア問題の解決に必須の条件であるという常識的な見解を合わせ考える必要があるであろう。

本書の再版と前後してアメリカで刊行された L. Hahn の *North Africa; Nationalism to Nationhood* は、アメリカ人的な観点からアルジェリアをめぐる国際外交の推移を跡づけることに重点を置いて、植民地の悲劇を浮きぼりにしようとしている。それなりに首肯される方法である。しかし政治的事件の裏にある“アルジェリア残酷物語”ともいべき植民地社会の実体を伝える上では本書がはるかにまさっている。コンゴ、アンゴラなどとともに、20世紀後半の汚点といわれる暗黒の闘争を取り上げ、短い紙幅で「真相」に迫ろうとしたところが評価されるべきであろう。

(朝日新聞社特信部 田中 宏)